

栗原霞崖展

狭山の知られざる画家

平成7年 **7月15日(土)~8月27日(日)**



狭山市立博物館

〒350-13 狭山市稲荷山1-23-1 稲荷山公園（ハイドパーク）内 西武池袋線「稲荷山公園駅」から徒歩3分

TEL. (0429) 55-3804(代表) FAX. (0429)55-3811

〈鬼に鍾馗〉

開催にあたって

狭山市は、狭山茶を代表とする近郊農業地域であるとともに、東京から35km圏内に位置することから近年住宅都市として、かつ内陸型工業都市として発展してきました。このような狭山市の姿を見ると、私たちは、武蔵野の台地と入間川の清流に生まれ、そこに生活を営んできた多くの先人たちの努力を、垣間見ることができます。

今回は、狭山の知られざる画家として、大正・昭和期に活躍した栗原霞崖^{くりはら か がい}をとりあげ、この紹介をいたします。栗原霞崖は、文久元(1861)年6月、入間郡入間村(現在の狭山市水野^{ばん し})に生まれ、本名伴司^{ばん し}、別に一川月洲^{いちかわげつしゅう}と称しました。長じて寺子屋の講師をして、24歳にして所沢の雛忠という雛人形店に奉公に上がり、その後、幼少より画才にとんでいたことから、一川三光^{いちかわさんこう}、高橋南崖^{たかはしなんがい}(現在の坂戸市出身)等に師事し、南画を修め、「霞崖」という号を使うようになりました。

霞崖は、所沢の雛忠で修業をつんで際物商^{きりものしょう}を営んでいたことから、画題として、好んで縁起物を題材にとり入れ、主に花鳥山水、人物画を得意としました。本格的な絵画への取り組みは、60歳頃からで、昭和15(1940)年80歳で亡くなるまで、精力的に活動し、屏風・軸物に多数の作品を遺しました。なかでも、一川三光の手ほどきを受けた鍾馗図に工夫を加え、大正11(1922)年3月には、東洋美術展覧会で特選を受賞しました。本企画展では、現在確認されている80余点の作品の中から、代表的なものを展示します。多数の皆様方にご観覧いただければ幸いです。

最後になりましたが、本企画展の開催にあたり、貴重な資料の調査・出品を快くご承諾くださいました所有者、関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

狭山市立博物館



達磨

美人画



開館時間

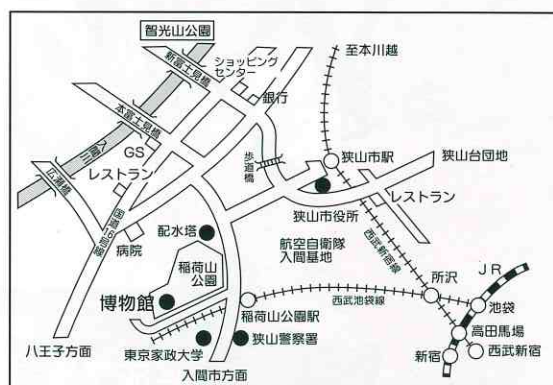
午前9時～午後5時

休館日

7月17日・24日・28日・31日
8月7日・14日・21日・25日

入館料

一般 150円(100円)
高校生・大学生 100円(60円)
小学生・中学生 50円(30円)
()内は20名以上の団体



- 西武池袋線「稲荷山公園駅」から徒歩3分
- 西武新宿線「狭山市駅」西口からバス(稲荷山公園駅行)終点下車徒歩3分

狭山市立博物館

〒350-13 狭山市稲荷山1-23-1 稲荷山公園(ハイパーク)内
TEL. 0429-55-3804(代表) FAX. 0429-55-3811

栗原霞彦展

狭山の知られざる画家



開催にあたって

狭山市は、狭山茶を代表とする近郊農業地域であるとともに、東京から35km圏内に位置することから近年住宅都市として、かつ内陸型工業都市として発展してきました。このような狭山市の姿を見るとき、私たちは、武蔵野の台地と入間川の清流に生まれ、そこに生活を営んできた多くの先人たちの努力を、垣間見ることができます。

今回は、狭山の知られざる画家として、大正・昭和期に活躍した栗原霞崖くははる かげがいを取りあげ、この紹介をいたします。栗原霞崖は、文久元(1861)年6月、入間郡入間村(現在の狭山市水野)に生まれ、本名伴司ばんし、別に一川月洲いちかわげつしゅうと称しました。長じて寺子屋の講師をして、24歳にして所沢の難忠という雛人形店に奉公に上がり、その後、幼少より画才にとんでいたことから、一川三光いちかわさんこう、高橋南崖たかはし なんがい(現在の坂戸市出身)等に師事し、南画を修め、「霞崖」という号を使うようになりました。

霞崖は、所沢の難忠で修業をつんで際物商きわものしょうを営んでいたことから、画題として、好んで縁起物を取り入れ、主に花鳥山水、人物画を得意としました。本格的な絵画への取り組みは、60歳頃からで、昭和14(1939)年80歳で亡くなるまで、精力的に活動し、屏風・軸物に多数の作品を遺しました。なかでも、一川三光の手ほどきを受けた鍾馗図に工夫を加え、大正11(1922)年3月には、東洋美術展覧会で特選を受賞しました。本企画展では、現在確認されている80余点の作品の中から、代表的なものを展示します。多数の皆様方にご観覧いただければ幸いです。

最後になりましたが、本企画展の開催にあたり、貴重な資料の調査・出品を快くご承諾くださいました所有者、関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

狭山市立博物館

凡例

- 本書は、平成7年7月15日より8月27日まで開催する平成7年度夏期企画展「栗原霞崖展」の展示図録である。
- 図録の図版番号は、作品一覧並びに展示資料番号と一致する。ただし、展示順序は、必ずしも、この番号順とは限らない。
- 会期中には、一部展示替えを予定している。
- 本企画展の展示及び図録の編集は、狭山市立博物館で行った。

図版

73. 鶏

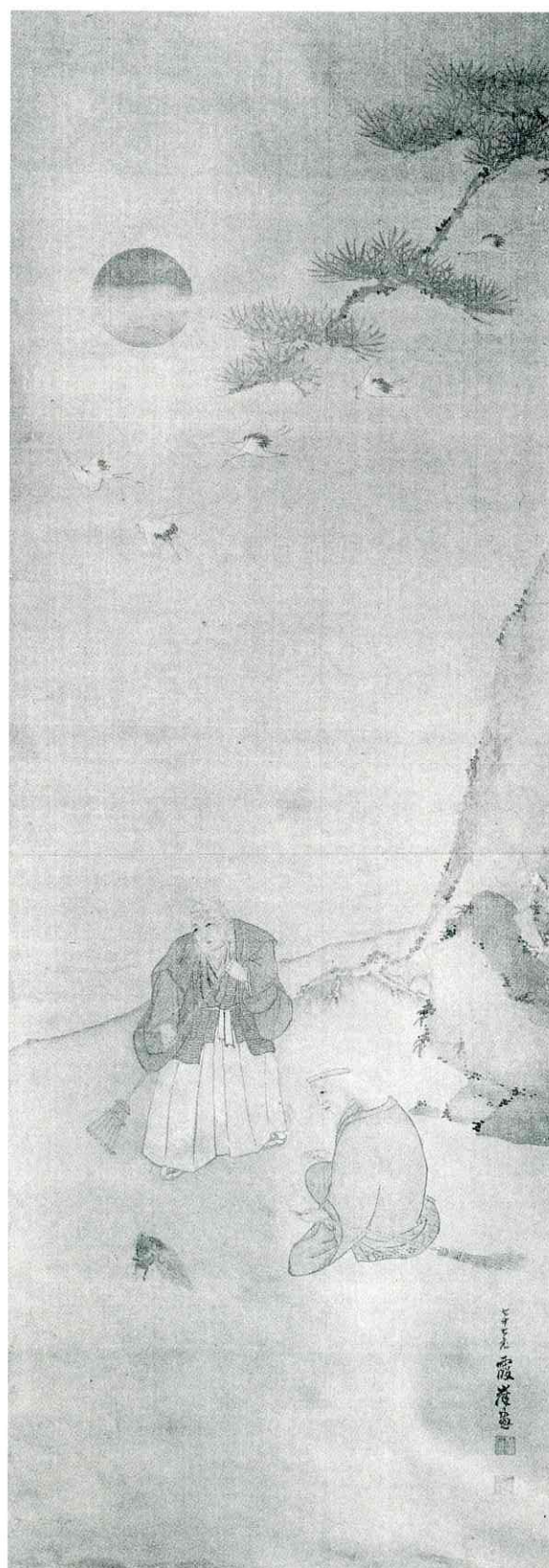


13. 梅に鶯



14. 高砂

39. 高砂





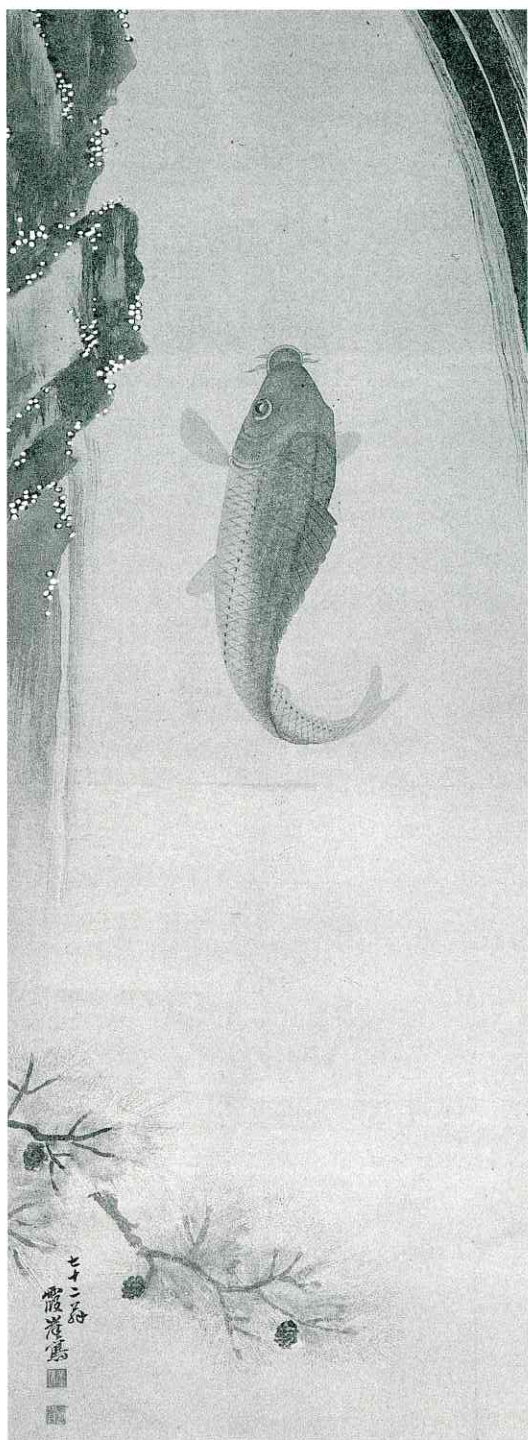
58. 大黒



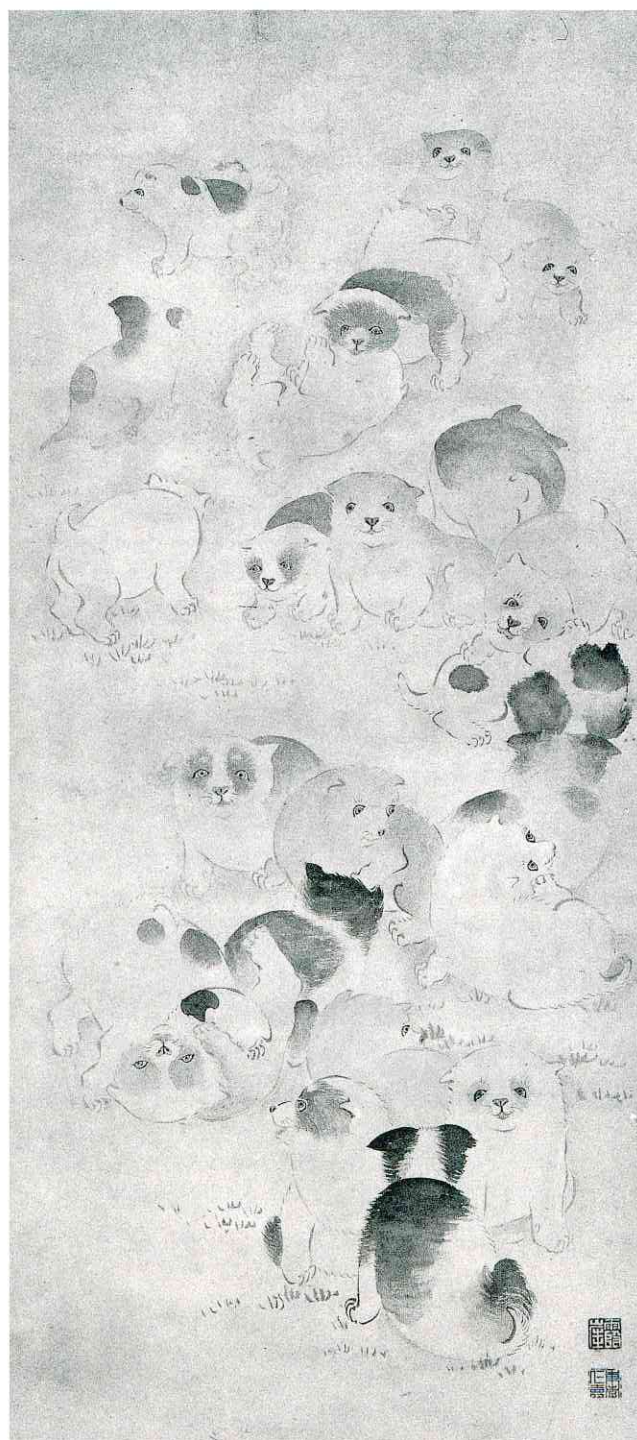
53. 恵比寿大黒



35. 惠比寿大黒（対幅）



24. 鯉の滝上り



10. 戯犬



68. 蓮華



26. 御雛様

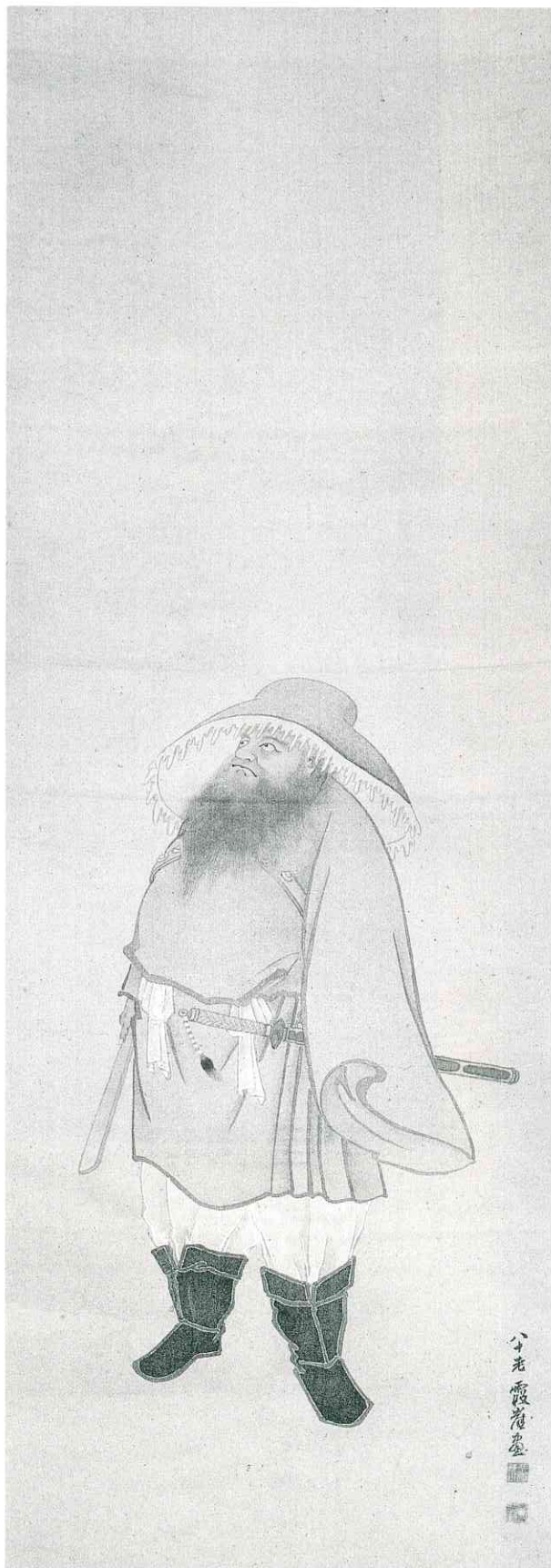


66. 鍾馗



47. 鍾馗

44. 笠鍾馗

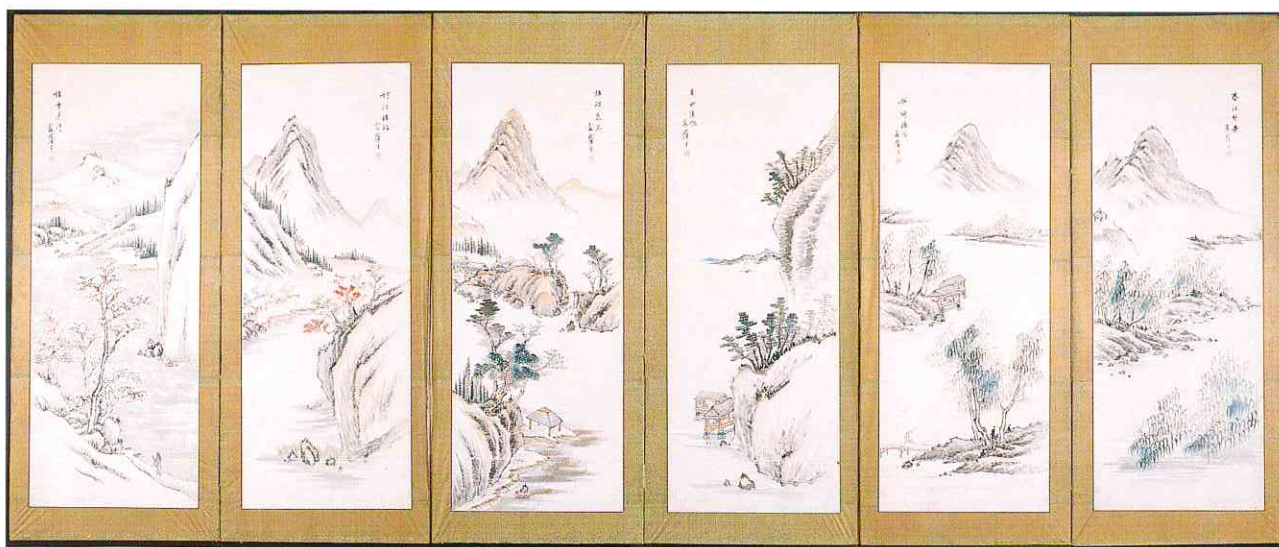


74. 笠鍾馗

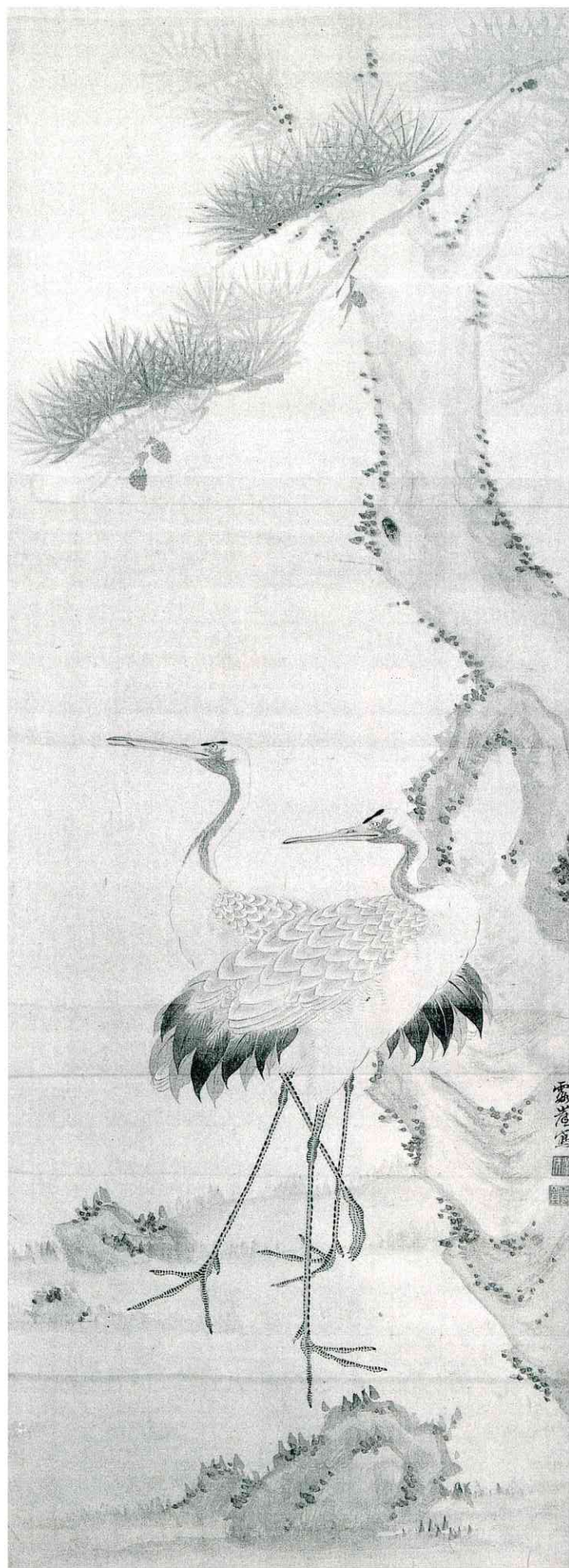
4. 十三仏



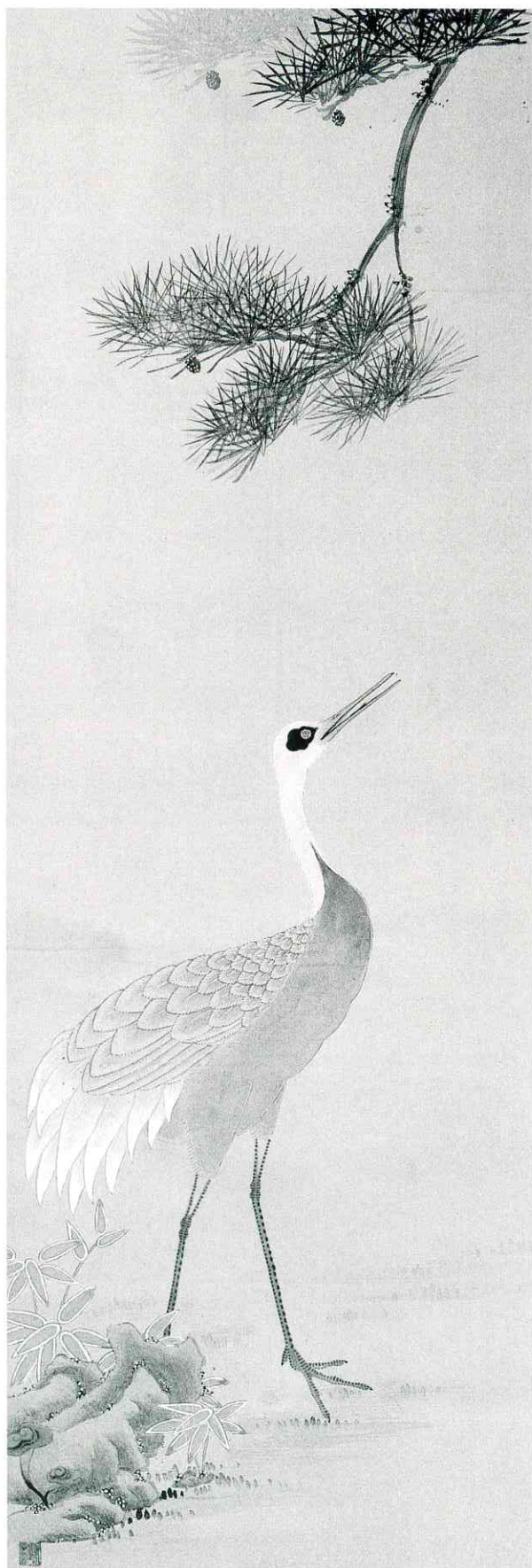
11. 十三仏



46. 山水



33. 鶴と松



42. 鶴と松 (対幅)



57. 国造

77. 木花之開耶姬

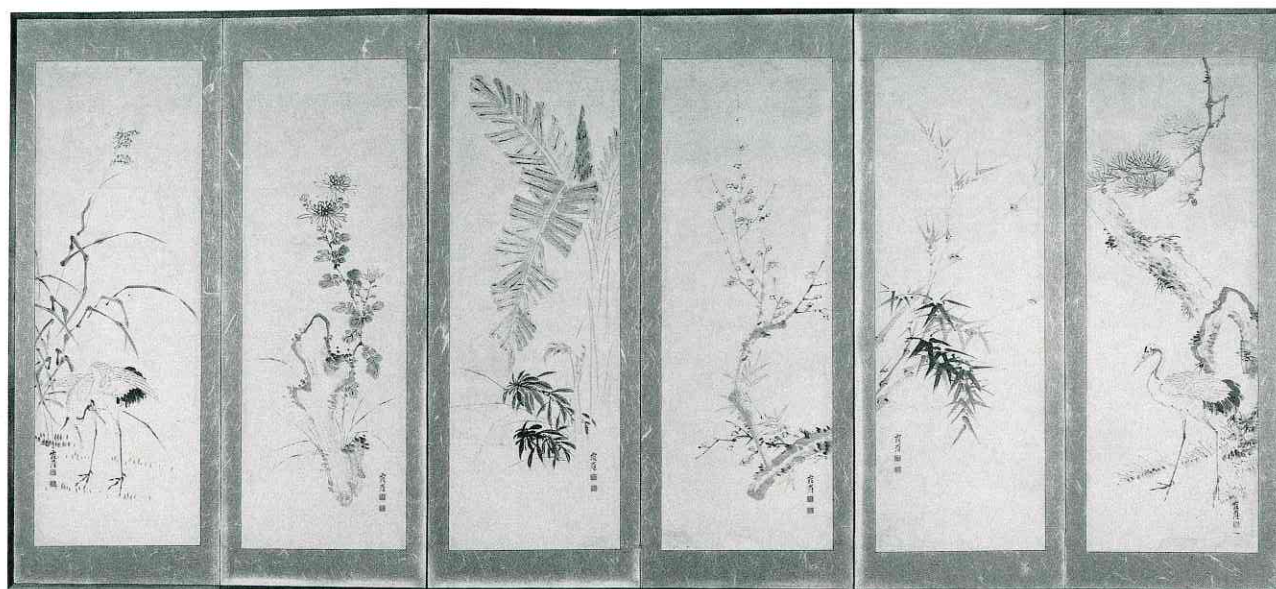




1. 達磨



43. 米研婦



12. 鳥木図

69. 鬼に鍾馗

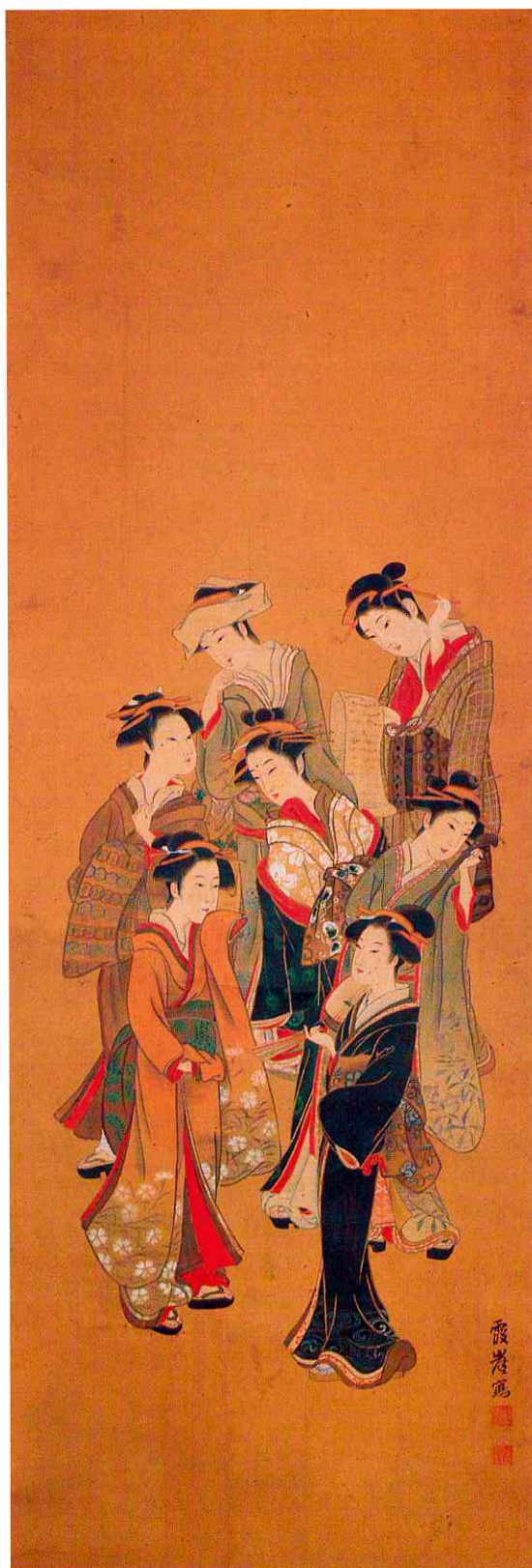


59. 鬼に鍾馗



67. 美人画

84. 七人美人





71. 御多福

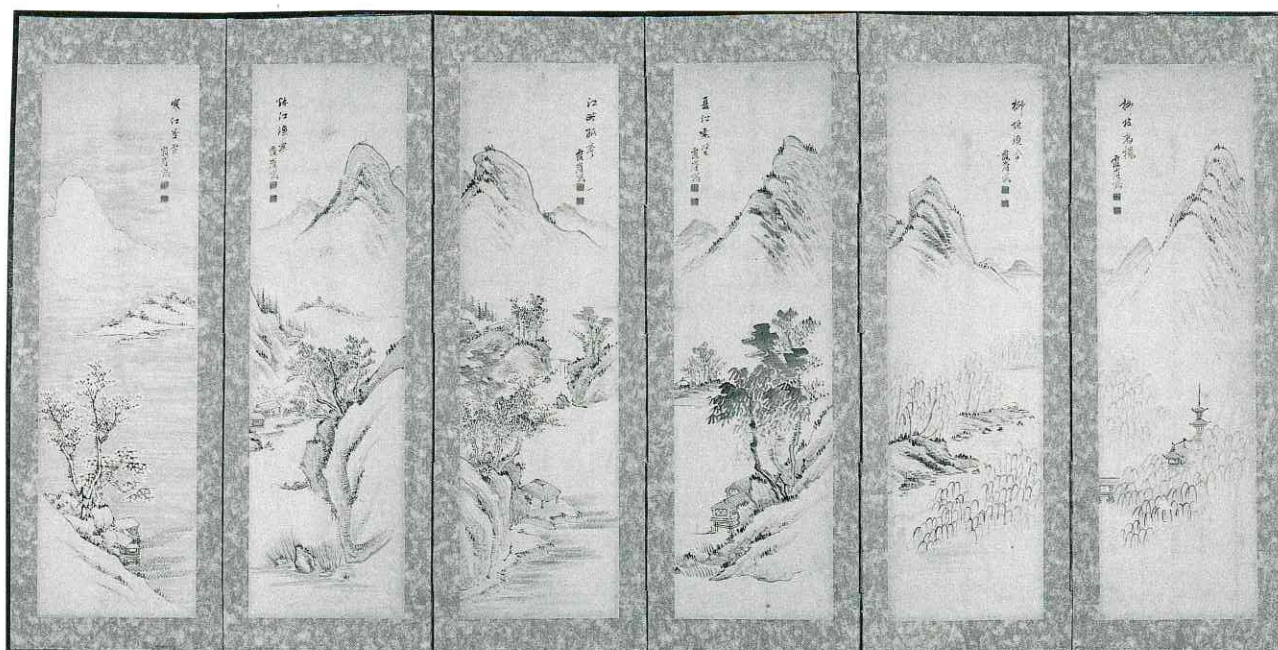




3. 七福神



16. 七福神

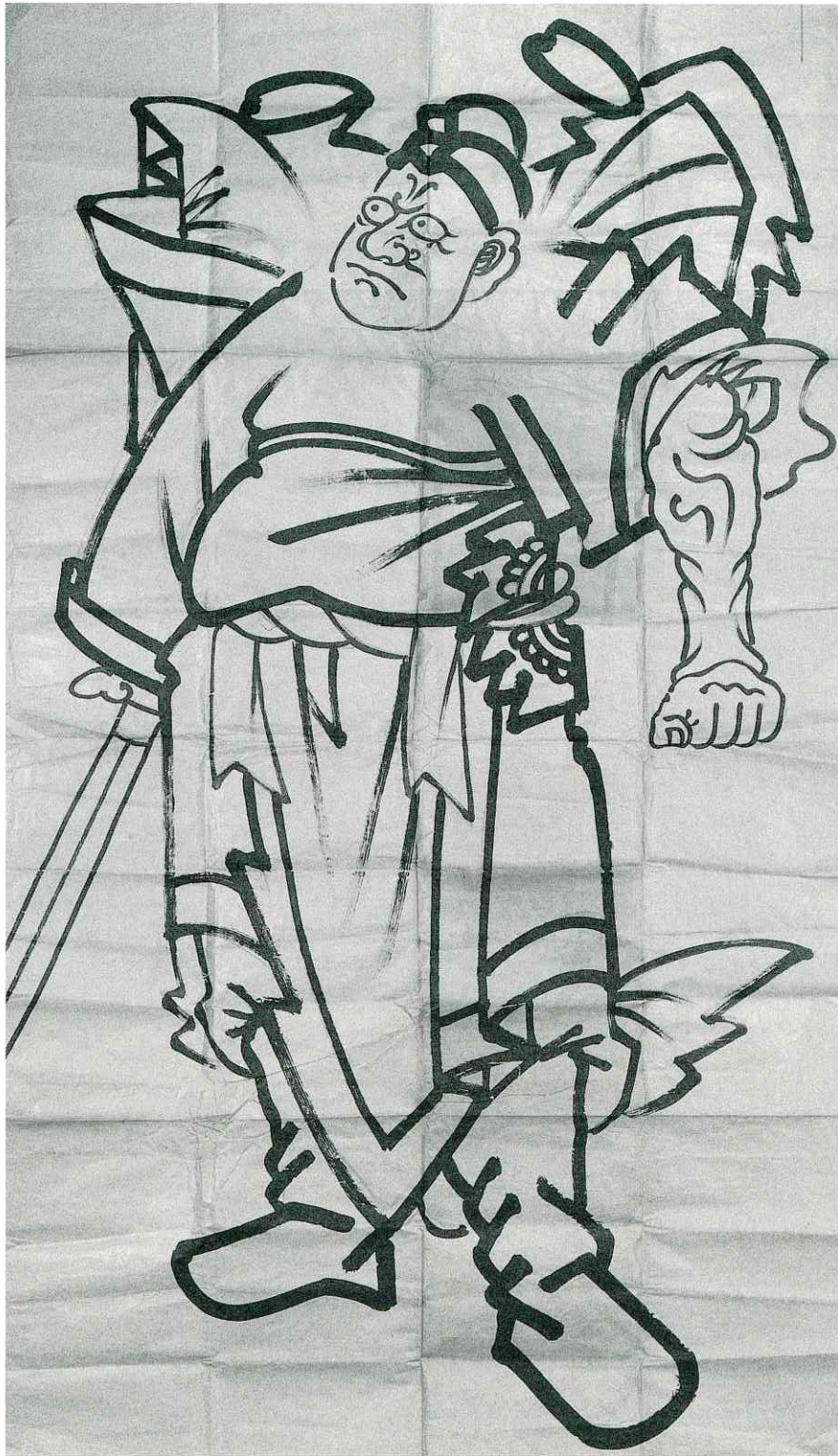


21. 山水

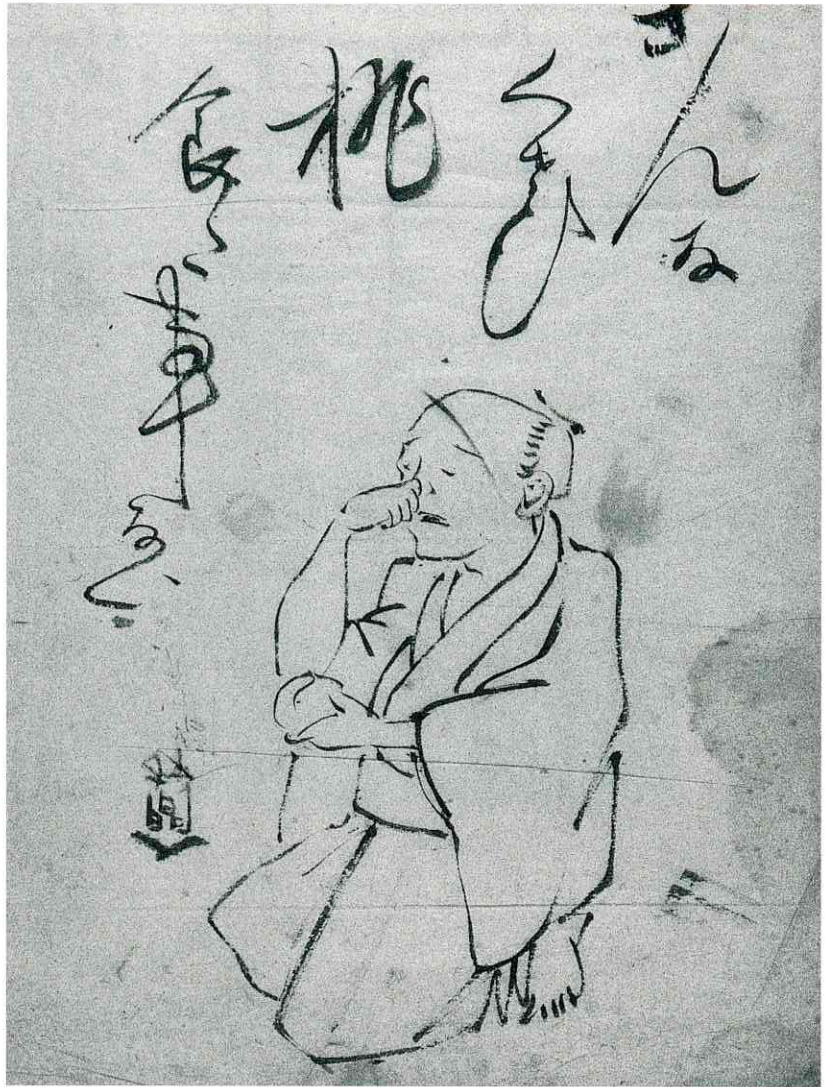


83. 獅子舞

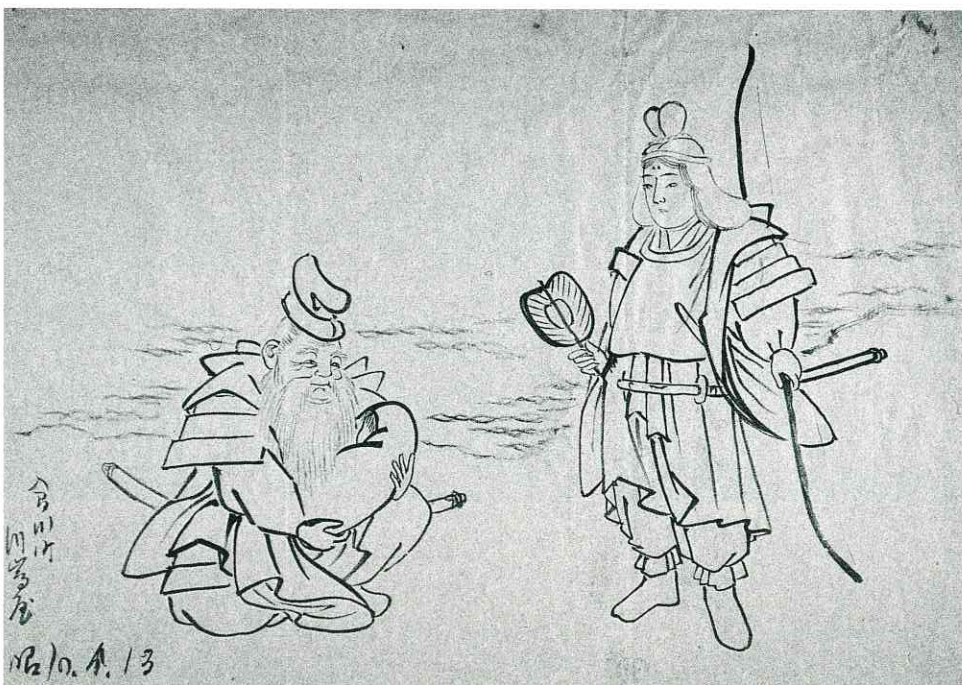
関連資料



下絵（鍾馗外幟）



下絵（地口行灯）



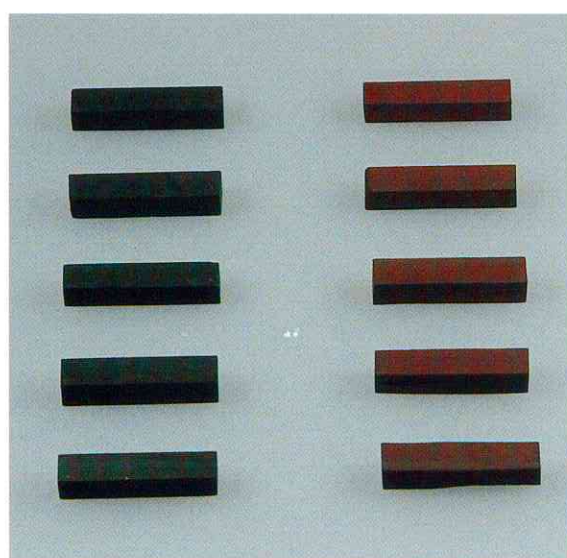
下絵（座敷幟）



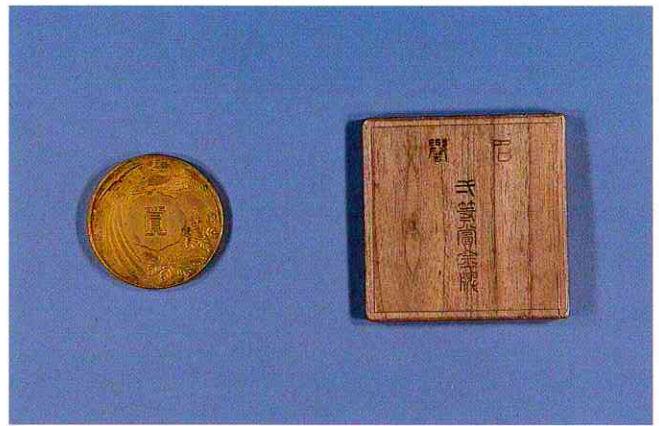
鍾馗画本（一川三光画）



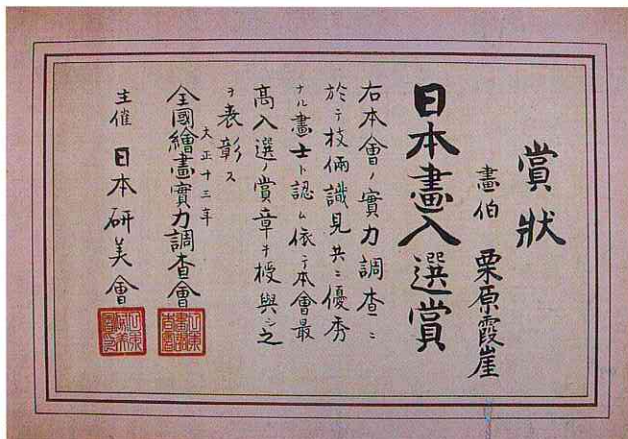
寺子屋教本



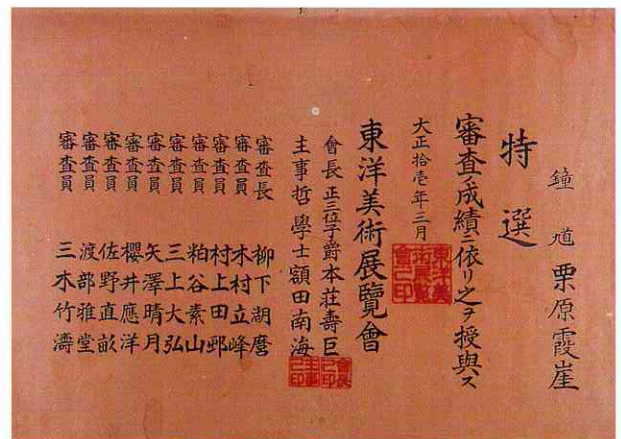
算木



賞状（大正10（1921）年「寒江獨釣之圖」名譽一等）・同金牌



賞状（大正11（1922）年入選）



賞状（大正11（1922）年「鍾馗」特選）

栗原霞崖

(くりはら・かがい 1861~1939)

■略歴

栗原霞崖は、本名伴司、別に一川月洲と号し、文久元(1861)年6月、入間村(現在の狭山市水野)に生まれる。長じて寺子屋の講師をするかたわら、所沢の雛忠に奉公に上がり、その画才を認められ、一川三光、高橋南崖(現在の坂戸市出身)等に師事し、南画を修めた。

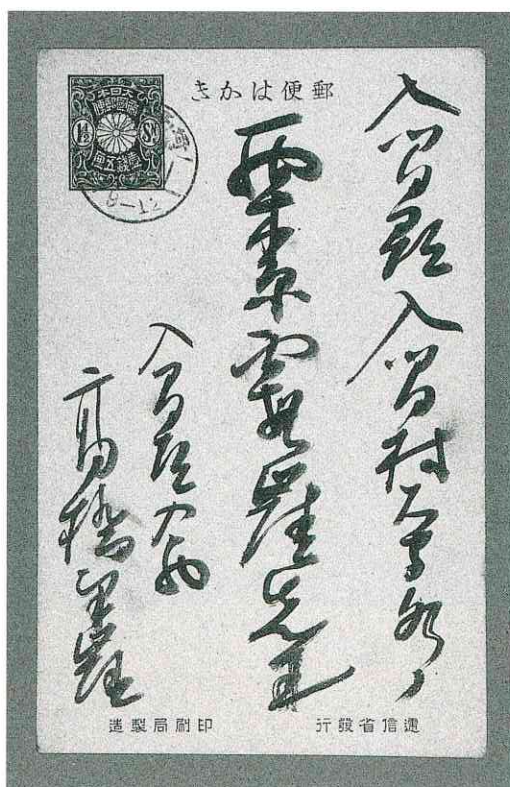
当時の日本美術界では、来日していた東洋美術研究家であるフェノロサが、岡倉天心らとともに、新しい日本画の芸術運動を展開し、その発言や執筆活動を通して、混迷していた日本美術界に大きな影響を与えていた。その後、明治期

後半では、様々な芸術団体・美術団体が林立し、大正期に入ると、その改編と新たな結成が相次ぎ、活発な芸術活動が展開されるようになった。

このような時期に、南画を含む日本画の美術団体として、大正元(1912)年に、帝国絵画協会が新たに設立され、中央のみならず地方における日本画諸家の絵画活動の普及に貢献していた。埼玉県内を見ても、同会の会員に、勝田蕉琴(現在の川越市出身)が帝展に、江森天寿(現在の深谷市出身)が文展で活躍していた。



栗原霞崖肖像

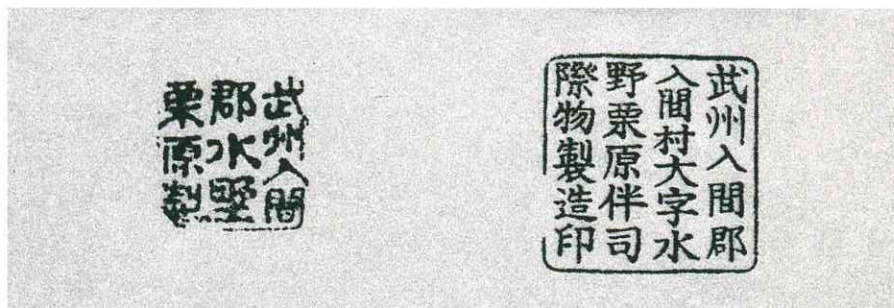


霞崖も、帝国絵画協会の会員として研鑽を重ね、大正10(1921)年2月に、「寒江独釣之図」が全国絵画実力調査会で名誉一等をとり、金牌を授与され、翌大正11(1922)年には、入選を果たした。また、同年3月には、一川三光の手ほどきを受けた鍾馗図に工夫を加え、東洋美術展覧会にて特選を受賞した。

霞崖の本格的な絵画への取り組みは、60歳頃からで、画題として、好んで縁起物を取り入れ、主に花鳥山水、人物画を得意とした。画風は、師である南崖の作風に倣い、南画の画法を踏襲しているほか、河鍋曉斎、円山応挙等のいろいろな画法を独学研修して、静的な情景を描写している作品が多い。こうして、昭和14(1939)年80歳で亡くなるまで、精力的に活動し、屏風・軸物に多数の作品を遺した。

高橋南崖葉書(霞崖宛)

際物商印影



霞崖は、24歳の時、所沢の雛忠商店（通称、雛忠）という雛人形の製造・販売を営む商店に奉公にあがり、修業をつんで、その後、自宅で際物商を営んでいた。当時、狭山を含めた所沢地方の雛人形の製造は、県内では、岩槻・鴻巣と並んでたいへん盛んな地域であった。なかでも、所沢の雛忠は、胴屋職人の多くが、その技術を習得するために修業した場所であり、現在も、狭山を含めた所沢地方の雛人形の製造では、その系統を踏襲したものが多い。

雛忠は、嘉永6(1853)年頃、二上安左衛門が、紀伊国より移り住んで、入間市豊岡で技術を習得した後、川越にて修業して、所沢に創業したと伝えられている。二代忠蔵が、安左衛門と同様に、入間市豊岡にて修業して、事業を広げ、狭山を始め、所沢・入間・三芳方面に多くの弟子を輩出した。その後、大正から昭和にかけての時代には、雛人形の製造も隆盛を極めた。

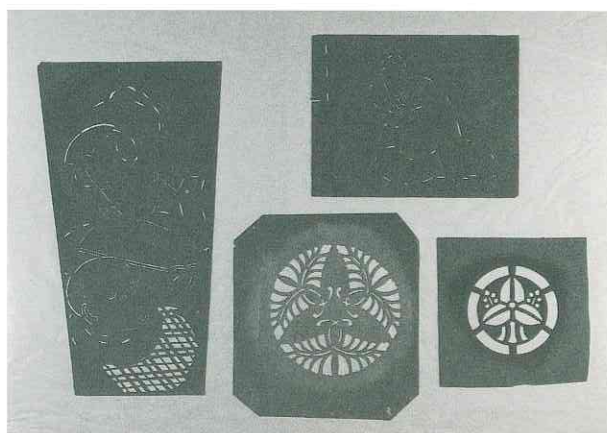
霞崖は、雛忠で覚えた技術と経験をもとに、自宅で際物商を営んだ。際物商は、季節で必要となるものを商売するもので、霞崖の場合は、雛人形のほか、持ち前の画才から幟旗・羽子板・絵馬・提灯等を商っていた。雛忠での霞崖は、昼間、諸先輩に人形作りの技術を教わっていたかわら、夜には、奉公人の中で読み書きのできる数少ない一人であったので、諸先輩に読み書きを教えていたという。こうしたことから、商売を独立した後も、雛忠に係わりのある職人達に慕われ、様々な下絵を提供した。ここに展示されたものも、それらの一部である。

また、霞崖は、入間地区では本名から「伴司さん」と慕われ、埼玉県指定無形民俗文化財である「入曾の獅子舞」の「ささら」役がかぶる花笠の飾り花を作っては、「伴司さんの飾り花の色は、雨が降っても色が落ちない」と評判であった。

下絵 (商店印)



紙型 (左:羽子板、右上:絵馬、右下2点:家紋)





『帝国絵画名鑑』大正五年版



同上 部分

埼玉県にゆかりのある帝国絵画協会会員

氏 名	画 号	出生地（居住地）	備 考
會 田 徹 夫	晴 山	岩 槻 市	
井 上 東 雲	秀 石	秩 父 市	
今 井 傳 次	琴 谷	秩 父 市	
江 森 天 淵	天 淵	寄 居 町 (深 谷 市)	
江 森 天 寿	天 寿	深 谷 市	文展出品 宮中献上あり
岡 田 甚七郎	白 柳	妻 沼 町	
奥 原 輝	晴 翠	—	奥原晴湖の養女。晴湖は、明治24年より熊谷市に居住
小 澤 藤 太	琴 山	入 間 市	
貝 原 兼太郎	遜 軒	行 田 市	
粕 谷 金十郎	素 山	熊 谷 市	
勝 田 良 雄	蕉 琴	川 越 市	文展 国画玉成会 帝展 日展 出品 帝展審査員を歴任
金 子 梶三郎	米 軒	宮 代 町	
岸 傳 平	松 谷	川 越 市	
栗 原 伴 司	霞 崖	狭 山 市	
黒 澤 和 三	墨 山	皆 野 町	
小久保 又三郎	高 嶺	秩 父 市	
小 島 善 作	清 洲	大 宮 市	
小 杉 宜 道	香 雪	(妻 沼 町)	
佐々木 豊 嗣	信 光	(浦 和 市)	
高 橋 喜千三	觀 石	菖 蒲 町	
高 橋 新次郎	南 崖	坂 戸 市	霞崖の師
中 澤 力	厚 邨	神 川 町	
中 野 徳 隣	草 枕	(入 間 市)	
蜂 須 近 三	秋 雲	熊 谷 市	
早 川 三 郎	仙 舟	越 谷 市	
平 井 卓	呉 鳳	桶 川 市	
保 積 幸 藏	永 遠	鳩 山 町	
毛 呂 眞	桑 陰	川 越 市	
柳 田 かつら	桂 華	岡 部 町	
山 田 久太郎	北 洲	大 宮 市	
吉 原 義 雄	雅 風	熊 谷 市	

※ 『帝国絵画名鑑 大正五年版』より作成。
 なお、出生地（居住地）は、現在の市町村名を記した。

栗原霞崖作品一覧

No.	作 品 名	材質形状	全体寸法（作品寸法） 単位：cm	制作年代	年齢	印番	備考
01	達 磨	絹本 軸	194.4×54.2 (119.5×41.6)	昭和14年	79	1.2.	※
02	高 砂	絹本 軸	193.5×55.3 (117.6×41.4)	昭和12年	77	1.2.	
03	七 福 神	紙本 軸	171.8×65.1 (100.9×51.7)	昭和 9 年	74	1.2.	※
04	十 三 仏	絹本 軸	143.9×58.4 (57.9×41.6)	昭和 7 年	72	1.2.	※
05	笠 鍾 馗	絹本 軸	195.0×54.1 (117.1×41.3)	昭和 6 年	71	1.2.	
06	鬼 に 鍾 馗	絹本 軸	164.4×54.7 (111.0×41.9)	昭和 5 年	70	1.2.	
07	大 黒	紙本 軸	191.3×44.6 (107.3×33.1)	大正12年	63	1.2.	
08	恵比寿大黒	紙本 軸	144.5×40.7 (62.1×30.4)	大正10年	61	2.	
09	恵比寿大黒	紙本 軸	109.3×44.5 (27.8×34.0)	—	—	1.2.	
10	戯 犬	紙本 軸	204.9×65.3 (111.0×50.4)	—	—	3.4.	※
11	十 三 仏	絹本 軸	177.4×57.3 (105.7×41.0)	昭和 7 年	72	1.2.	※
12	鳥 木 図	紙本屏風	151.0×332.1	—	—	1.2.	※
13	梅 に 鶯	絹本 軸	168.4×54.7 (114.5×41.3)	—	—	1.2.	※
14	高 砂	絹本 軸	178.6×53.4 (120.8×41.2)	昭和 5 年	70	1.2.	※
15	御 多 福	絹本 軸	180.0×52.5 (118.2×40.8)	—	—	1.2.	※
16	七 福 神	紙本 軸	215.8×44.6 (133.4×33.0)	大正13年	64	3.4.	※
17	鶴 と 松	絹本 軸	206.7×54.0 (118.0×41.0)	昭和 5 年	70	1.2.	
18	大 黒	紙本 軸	172.0×47.9 (110.6×33.2)	大正12年	63	1.2.	
19	恵比寿大黒	紙本 軸	168.0×44.2 (116.8×32.4)	昭和 7 年	72	1.2.	
20	恵比寿大黒	絹本 軸	173.3×53.6 (110.0×41.7)	大正13年	64	1.2.	
21	山 水	紙本屏風	137.3×273.0	—	—	1.2.	※
22	笠 鍾 馗	絹本 軸	185.6×55.3 (116.9×41.4)	昭和12年	77	1.2.	
23	高 砂	絹本 軸	191.3×53.1 (121.1×41.5)	昭和12年	77	1.2.	
24	鯉 の 滝 上 り	絹本 軸	193.5×54.3 (113.6×41.2)	昭和 7 年	72	1.2.	※
25	恵比寿大黒	紙本 軸	対幅右134.7×42.8 (67.7×32.3) 左136.4×43.3 (67.7×31.4)	—	—	1.2.	
26	御 雛 様	紙本 軸	139.0×47.5 (61.4×35.8)	—	—	2.	※
27	高 砂	絹本 軸	184.6×52.3 (118.3×41.4)	昭和12年	77	1.2.	
28	恵比寿大黒	絹本 軸	170.0×49.3 (102.1×38.6)	大正 8 年	59	1.2.	
29	大 黒	紙本 軸	206.0×54.7 (119.0×42.4)	昭和 5 年	70	1.2.	
30	大 黒	紙本 軸	157.8×52.7 (92.6×41.6)	—	—	5.	
31	恵比寿大黒	紙本 軸	152.3×51.8 (81.5×39.6)	昭和12年	77	1.2.	
32	恵比寿大黒	紙本 軸	144.5×54.9 (58.4×41.6)	—	—	5.	
33	鶴 と 松	絹本 軸	205.1×54.1 (115.5×40.8)	—	—	1.2.	※
34	恵 比 寿	紙本 軸	150.1×44.0 (66.5×32.8)	—	—	3.4.	
35	恵比寿大黒	紙本 軸	対幅右142.5×43.4 (70.1×31.5) 左142.5×43.6 (70.1×31.5)	—	—	1.2.	※
36	鬼 に 鍾 馗	絹本 軸	180.8×54.9 (119.4×41.7)	昭和10年	75	1.2.	
37	鶴	紙本 軸	165.3×41.4 (114.0×31.2)	—	—	1.2.	
38	恵比寿大黒	紙本 軸	131.8×41.0 (64.2×30.3)	—	—	1.2.	
39	高 砂	絹本 軸	201.0×53.8 (112.8×40.4)	昭和12年	77	1.2.	※
40	恵比寿大黒	紙本 軸	131.0×40.1 (61.7×29.3)	大正13年	64	1.2.	
41	笠 鍾 馗	絹本 軸	193.8×53.0 (114.4×40.3)	—	—	1.2.	
42	鶴 と 松	絹本 軸	対幅右193.7×53.6 (118.6×41.4) 左193.7×53.6 (118.6×41.4)	昭和12年	77	1.2.	※
43	米 研 婦	紙本 軸	217.5×45.2 (135.0×33.6)	昭和 5 年	70	3.4.	※
44	笠 鍾 馗	絹本 軸	187.4×54.2 (111.8×40.2)	昭和15年	80	1.2.	※
45	鬼 に 鍾 馗	絹本 額	85.0×42.7 (78.8×36.8)	昭和10年	75	1.2.	※

No.	作 品 名	材質形状	全体寸法（作品寸法） 単位：cm	制作年代	年齢	印番	備考
46	山 水	紙本屏風	153.4×364.8	—	—	5.	※
47	鍾 馗	紙本 軸	209.4×44.3 (127.8×32.5)	—	—	1.2.	※
48	鶴 と 松	絹本 軸	205.4×53.6 (116.8×40.4)	昭和 8 年	73	1.2.	
49	恵 比 寿 大 黒	紙本 軸	147.8×39.5 (64.5×29.6)	大正10年	61	5.	
50	恵 比 寿 大 黒	紙本 軸	178.4×52.8 (89.6×39.1)	—	—	1.2.	
51	笠 鍾 馗	絹本 軸	208.4×54.3 (120.8×40.6)	昭和10年	75	1.2.	
52	笠 鍾 馗	絹本 軸	174.3×55.1 (120.5×41.8)	昭和10年	75	1.2.	
53	恵 比 寿 大 黒	紙本 軸	155.7×39.9 (76.7×29.0)	—	—	1.2.	※
54	鬼 に 鍾 馗	絹本 軸	203.8×54.1 (114.7×40.8)	—	—	1.2.	
55	恵 比 寿 大 黒	紙本 軸	140.0×41.9 (68.1×32.3)	—	—	1.2.	
56	恵 比 寿 大 黒	紙本 軸	152.4×42.4 (89.8×32.2)	—	—	1.2.	
57	国 造	紙本 軸	130.8×38.8 (64.1×28.8)	—	—	—	※
58	大 黒	絹本 額	37.4×75.8 (28.9×48.8)	昭和11年	76	1.2.	※
59	鬼 に 鍾 馗	絹本 軸	191.8×55.1 (116.6×40.9)	昭和 8 年	73	1.2.	※
60	笠 鍾 馗	絹本 軸	176.7×52.6 (114.4×40.8)	昭和 9 年	74	1.2.	
61	笠 鍾 馗	絹本 軸	164.8×53.4 (111.8×38.8)	昭和12年	77	1.2.	
62	笠 鍾 馗	絹本 軸	204.8×53.3 (115.1×40.1)	昭和10年	75	1.2.	
63	大 黒	紙本 軸	195.6×44.1 (111.0×32.6)	昭和10年	75	1.2.	
64	鬼 に 鍾 馗	絹本 軸	200.5×53.4 (116.6×40.9)	昭和10年	75	1.2.	
65	恵 比 寿 大 黒	紙本 軸	166.8×44.9 (103.0×32.8)	昭和10年	75	1.2.	
66	鍾 馗	絹本 軸	175.0×39.5 (92.1×29.0)	—	—	1.2.	※
67	美 人 画	絹本 軸	192.7×54.7 (117.1×41.4)	—	—	—	※
68	蓮 華	木 彫	20.1×81.0 (13.7×74.9)	—	—	1.2.	※
69	鬼 に 鍾 馗	絹本 軸	166.1×55.7 (114.1×41.6)	昭和 5 年	70	1.2.	※
70	恵 比 寿 大 黒	紙本 軸	143.3×41.4 (68.6×30.6)	昭和10年	75	1.2.	
71	御 多 福	絹本 軸	177.3×50.9 (115.8×40.6)	—	—	1.2.	※
72	高 砂	絹本 軸	202.3×53.9 (120.3×41.9)	昭和 8 年	73	1.2.	
73	鶏	絹本 軸	193.6×55.4 (134.3×41.9)	—	—	5.	※
74	笠 鍾 馗	絹本 軸	185.5×54.0 (116.8×41.3)	昭和 8 年	73	1.2.	※
75	鍾 馗	絹本 軸	139.0×38.4 (97.0×31.0)	—	—	5.	
76	御 雛 様	絹本 軸	124.3×41.0 (68.2×32.3)	大正 7 年	58	1.2.	
77	木花之開耶姫	紙本 軸	139.0×33.2 (83.6×22.4)	—	—	5.	※
78	鍾 馗	巻 紙	82.3×30.6	—	—	—	
79	十 三 仏	絹本 軸	102.8×50.9 (50.2×41.5)	昭和13年	78	2.	
80	大 黒	紙本 軸	173.0×48.2 (110.4×33.3)	大正12年	63	1.2.	
81	鍾 馗	紙本 軸	186.0×60.5 (91.8×44.9)	—	—	3.4.	
82	鬼 蹴 鍾 馗	紙本 軸	146.5×72.0 (52.0×65.8)	—	—	3.	
83	獅 子 舞	絵 馬	87.0×141.0	大正 4 年	55	5.	※
84	七 人 美 人	絹本 軸	182.5×52.0 (119.0×41.0)	—	—	1.2.	※
85	恵 比 寿 大 黒	紙本 軸	153.1×43.1 (84.7×32.3)	昭和12年	77	1.2.	
86	恵 比 寿 大 黒	絹本 軸	×				
87	恵 比 寿 大 黒	紙本 軸	対幅右 × (×) 左 × (×)				

1 この作品一覧は、平成 7 年 6 月 1 日現在で確認された作品の一覧である。

2 印番は、落款印の番号で、つぎのとおりである。

(1) 「栗原氏」：白文

(2) 「霞崖」：朱文

(3) 「霞崖」：白文

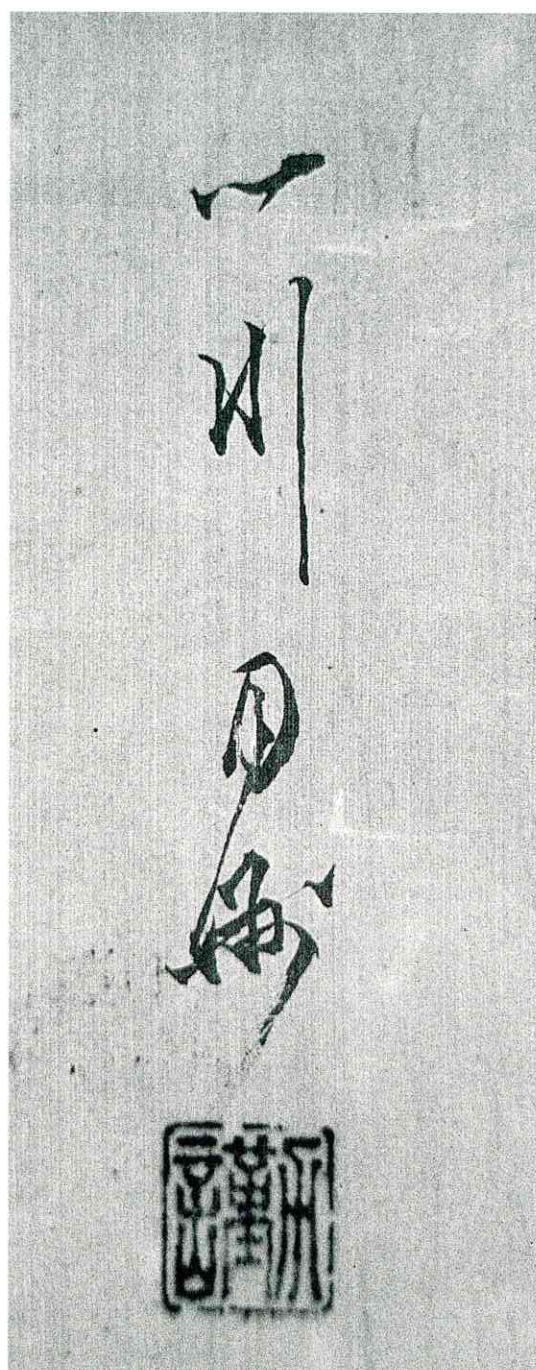
(4) 「東堂仁壽」：朱文

(5) 「勤言」：朱文

3 備考の※は、本企画展に展示したものである。



落款「霞崖」



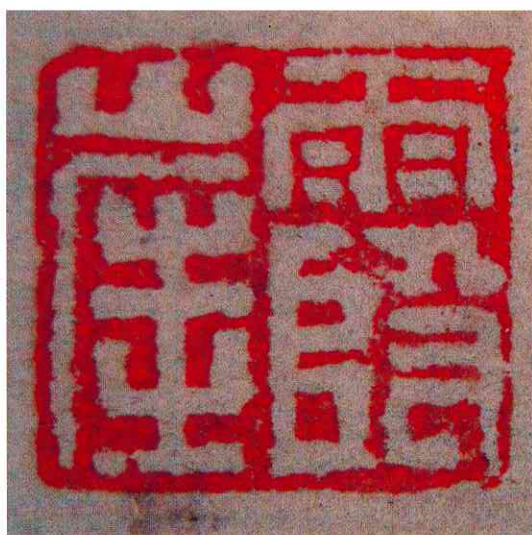
落款「一川月洲」



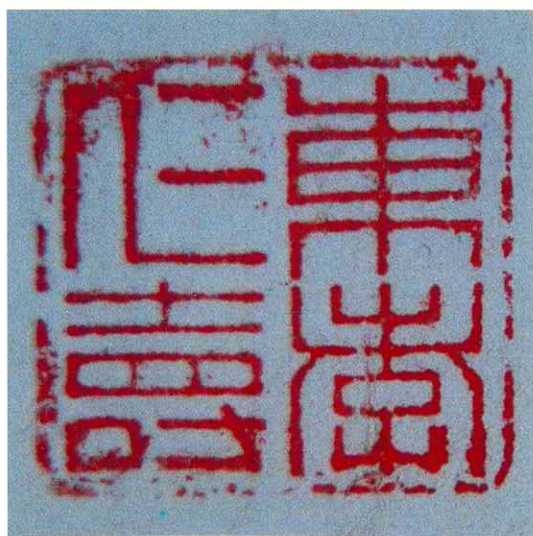
「栗原氏」印影：白文



「霞崖」印影：朱文



「霞崖」印影：白文



「東堂仁壽」印影：朱文



「勤言」印影：朱文

参考資料

- ・『帝国絵画名鑑』大正五年版 帝国絵画協会編 1916
- ・『埼玉の雛人形』埼玉県民俗工芸調査報告書第6集 埼玉県民俗文化センター編 1988
- ・『埼玉県史』通史編6近代2 埼玉県編 1989
- ・『所沢市史』通史編下・現代資料編・民俗資料編 所沢市編 1989～92
- ・『河鍋晩斎と菊池容斎』佐藤道信著 日本の美術No. 325 1993
- ・『際物』民俗工芸収蔵資料解説目録第1集 埼玉県民俗文化センター編 1995

企画展図録「栗原霞崖」正誤表

頁	行	誤	正
2	1 2	昭和14(1939)年	昭和15(1940)年
29	図版 下段	賞状(大正11(1922)年入選)	賞状(大正13(1924)年入選)
30	見出し	(くろはら・かみ 1861～1939)	(くろはら・かみ 1861～1940)
30	2 0	翌大正11(1922)年には、入選を果たした。また、同年3月には、一川三光の手ほどきを受けた鍾馗図に工夫を加え、東洋美術展覧会にて特選を受賞した。	翌大正11(1922)年3月には、一川三光の手ほどきを受けた鍾馗図に工夫を加え、東洋美術展覧会にて特選を受賞した。また、大正13(1924)年には、入選を果たした。
35	注 3項の次に4項を加える		4 86・87については、軸装中にて、未調査である。

協力者一覽

(順不同 敬称略)

栗原霞崖作品保存会

町 田 武一郎	栗 原 利 夫
栗 原 光 起	富 田 正 一
西 村 秀 夫	橋 本 三 郎
清 水 亮 一	広 沢 登
栗 原 喜代子	金 子 信 雄
斉 藤 栄 男	斉 藤 貞 夫
町 田 勝 弘	栗 原 一 男
小野田 健 司	指 田 武 男
町 田 安 治	土 金 英 作
溝呂木 節 子	斉 藤 勝 元
加 藤 保 雄	指 田 庫 二
栗 原 達	大 谷 一 男
指 田 定 一	指 田 宗三郎
室 岡 伸 幸	橋 本 要 作
本 木 敬 治	久保田 栄
栗 原 治 夫	大 谷 昇 一
植 竹 春 海	志 村 毗 亥
二 宮 喜三郎	渡 辺 東 子
丸 山 武	橋 本 安 雄
橋 本 恒 子	栗 原 加 市
二 上 純 一	宮 野 福 松
仲 川 幸 成	小 川 富美夫

田 中 一 男	宮 崎 道 夫
町 田 重 良	水 村 昭
金 剛 院	入 間 野 神 社

(財)河鍋晩斎記念美術館



狭山市立博物館

〒350-13 埼玉県狭山市稲荷山1-23-1
TEL. (0429) 55-3804(代) FAX. (0429)55-3811